

ザ・ペニンシュラ ビバリーヒルズ

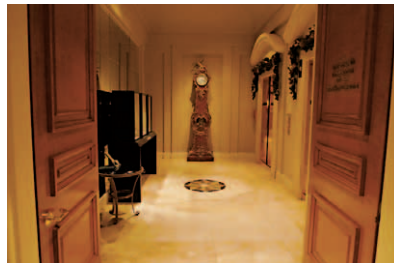
ペニンシュラホテルズ(香港上海ホテルズ、以下HSH)は1988年のアメリカ初進出のニューヨークに続いて、91年にロサンゼルス市のビバリーヒルズにザ・ペニンシュラビバリーヒルズを開業させた。瀟洒な洋館を訪れるような車寄せから見る威風堂々とした正面ファサードのたたずまいはある種の感動を覚える。ここは個人用の邸宅を想定して設計された5階建てのホテルで、客室はスタンダードのタイプでも45㎡以上の余裕のレイアウトだ。

映画「プリティウーマン」のロケホテル、ビバリー・ウィルシャーからサンタモニカ方向へWilshire BlvdとSanta Monica Blvdの交差する地点に立地している。交通量の多さと三角形に近い不利な地形と危惧したが、騒音は気にならず見事な敷地アレンジで解決している。味気ない従来のホテル外観構造とは一線を画し、正面ファサードに屋根を付け両翼を広げた建築美は現代ホテル建築の最高傑作の一つと評価したい。もちろんヨーロッパにはこの手のホテルはあまた存在するが、すべてが古き良き時代の建物を修復したものであり、90年代の新築ホテルとしては稀有な存在であろう。

ビバリーヒルズには魅惑的な隠れ家ホテルが多く散在する。ロサンゼルスは広大な市域を誇る街で、通常われわれが思い浮かべるL.A.は「ロサンゼルス郡」を指し、その域内にロサンゼルス市、ビバリーヒルズ市などに分かれている。したがってその市境界ライン沿いのホテルは、行政区画上は微妙な住所表示になってしまう。例えばペニンシュラやレルミタージュはビバリーヒルズ市だが、ベルエアやフォーシーズンズ・ビバリーヒルズなどはロサンゼルス市に含まれるという少々不可解な現実と直面することになる訳だ。

ザ・ペニンシュラビバリーヒルズは2000年に大規模改装を済ませ、193の客室・スイートと独立した16の別棟ヴィラを稼働させている。シェフのJ・オーバーク氏が率いるメインダイニングのザ・ベルベデーレは多くの受賞歴を誇る。ここでは、ゆっくりと南カリフォルニア料理を堪能したい。またラウンジのザ・リビングルームでは多くの地元ビバリーヒルズのセレブたちが、まさに自宅できつろぐようにアフタヌーンティーを楽しんでいる。

エントランスには常に数名のドアマン、ベルスタッフが常駐しており、近くのロデオドライブまでリムジンでのショッピング送迎サービスまである。このようなスタッフの高いホスピタリティ意識と、ビバリーヒルズ在住のセレブ顧客層がこのホテルの重要なアンビアンスを支えている。



コンシェルジュ・カウンターの前に、このようなアットホームな暖かみを感じるエレベーターホールがある。正面にあるアンティークのロングケース・クロックが非常に印象的な効果を醸し出している



スイミングプールの奥にあるジャグジーから俯瞰した屋上の全景。ここカリフォルニアは冬でもかなり暖かいのだが、この日はあいにく肌寒い日で青空は望めなかった



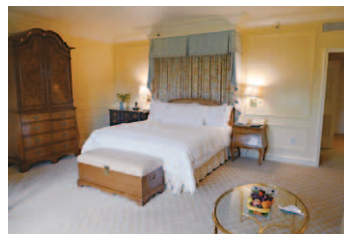
ラウンジ「The Living Room」の右暖炉の奥には、このように静寂に包まれたコーナーがある。外に見える緑豊かな庭園には独立したヴィラ棟に向かう小径が続いている



この部屋はグランドデラックスルームの客室で約57㎡の十分な広さを誇る。大型のライティングデスクよりクラシカルなキングベッドとシッティングエリア方向の俯瞰



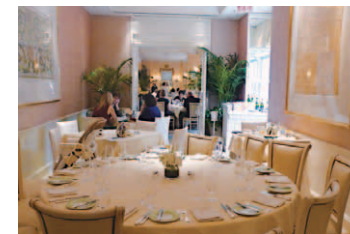
キングベッド横からベランダ開口部方向の俯瞰。この構図を見てダラスにあるローズウッドグループのクレセントホテルの客室配置を思い出す。この60㎡近い余裕の広さはバスルームを含めて心地よい



ルネサンス様式の豪華なキングベッドと家具。クラシカルな家具にはアナログではなくデジタルTVが内蔵され、ターンダウン後にはカウンターとグラスが入った引き出しがオープンになり、すてきなバーコーナーとなる



ザ・ペニンシュラビバリーヒルズのエントランス。瀟洒な洋館に向かう車寄せという感じの気品に満ちた造りで、これからの期待で自然と昂揚感が出てくる。規模は違うがどことなくモンテカルロのメトロポールの雰囲気に近い



メインダイニング「The Belvedere」の奥にある個室。地元グループのクリスマスディナーということで、テーブルセッティングが終わったところだ



ゆったりした時の流れのメインダイニング「Belvedere」での朝食の情景。ここではビュフェスタイルの慌ただしさはなく、アラカルトメニューから優雅に時間をかけて朝食を楽しむ



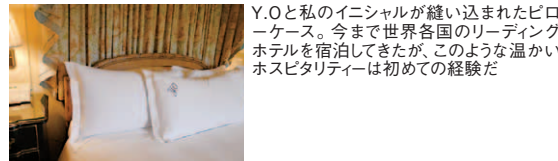
威風堂々とした正面ファサードの俯瞰。この見事な建築美は戦前の古典様式を除いて現代ホテル建築としては最高傑作の一つだと私は評価する



優雅なラウンジ「The Living Room」。ビバリーヒルズのセレブたちが話に興じている。左手に見えるハーブを奏でる女性や、中央で注文を聞く女性スタッフの動きが臨場感を出している



別の角度から見た「The Living Room」。午後のゆったりした時が流れ、地元ビバリーヒルズのセレブたちがアフタヌーンティーを楽しんでいる



Y.Oと私のイニシャルが縫い込まれたピローケース。今まで世界各国のリーディングホテルを宿泊してきたが、このような温かいホスピタリティは初めての経験だ

筆者 小原康裕
ホテルジャーナリスト。慶応義塾大学法学部法律学科卒。74年Munich Re入社。85年築地原健株代表取締役。2001年投資顧問会社原健設立、代表取締役CEO。
※現在、著者のホームページで「世界のリーディングホテル」を連載中。多くの美しい写真と興味深いコメントで、世界中のホテルとそれに関連都市を紹介。ホテルだけでなく、オリエントエクスプレスなど鉄道関係の掲載、季節刊行で世界遺産の案内などさまざまな情報が得られる。
www.jhrca.com/worldhotel

